



TITLE:

カール・クニースの國民經濟學

AUTHOR(S):

出口, 勇藏

CITATION:

出口, 勇藏. カール・クニースの國民經濟學. 經濟論叢 1935, 41(3): 391-409

ISSUE DATE:

1935-09-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/130629>

RIGHT:

東京帝國大學經濟學會 經濟論叢

第十四卷 第三號

昭和十年九月一日發行

論叢

神社と課税……………法學博士 神戸正雄

利子の限界生産力説……………文學博士 高田保馬

市町村の擔稅力……………經濟學博士 汐見三郎

時論

現金通貨の膨脹とその抑制……………經濟學博士 小島昌太郎

研究

保險價額規定無用論……………經濟學士 佐波宣平

カール・クニースの國民經濟學……………經濟學士 出口勇藏

産業的流通に於ける營業貨幣の流通速度……………經濟學士 中谷實

說苑

產物會所について……………經濟學博士 本庄榮治郎

ナチスの所得稅政策……………經濟學士 柏井象雄

カルテルの景氣變動への作用……………經濟學士 田杉競

附錄

新着外國經濟雜誌主要論題

カール・クニースの國民經濟學

出口 勇 藏

「各個の科學の個有の本質は、その研究範圍・それに課せられてゐる課題・及びこれを解くべき方法によつて規定せられるであらう。」と舊歴史學派の理論的代表者と目せらるゝカール・クニース（一八二一—一八九八）は云ふ。この言葉に従つて、我々は彼の理論的主著「歴史的立場より見たる政治經濟學」〔Die politische Oekonomie vom geschichtlichen Standpunkte, 1883〕¹⁾に於て、彼の國民經濟學の本質を検討したいと思ふ。

一、研究範圍即ち國民經濟

（一）クニースは、「國民經濟學に對しては只人間從つて國民をして家政的活動に赴かしめるところの外的善のみが考察せられる」、「外的善とは人間の欲望を満足せしむるに適する物的財である」と一般に經濟價值を規定してゐる。（二）經濟行為の規定に當つて、我々は先づクニースの人間學を見なければならぬ。「人間はその生命のために外界から對象を必要とする個別的有機體である」、と彼は云ふ。彼の人間學が有機體說であることに先づ注目しやう。經濟行為とは「經濟

- 1) K. Knies, Die politische Oekonomie vom geschichtlichen Standpunkte, 1883 S. 157.
- 2) Cf. J. K. Ingram, A History of Political Economy (1923) p. 198.
- 3) この書の第一版は、1853 Die politische Oekonomie vom Standpunkte der geschichtlichen Methode なる名の下に公けにされた。これの各章の終尾に Zusätze を加へ、新しき二章を附加したのが、この第二版である。

財の生産と獲得」のみならず、又「その適用と消費」をも意味する、即ち「國民經濟の主要部分」は生産・消費・分配である。¹⁾ この技術的規定と並んで實踐的規定がある。クニースに従へば、普通自由主義的經濟學に於て經濟行爲の唯一の動機だと考へられる Privategoismus は、自愛心 (Selbstliebe) と利己心 (Selbstsucht) とに分ける事が必要である。自愛心とは、Eigenwohl²⁾ を求める衝動であり、「その概念に於ては家族・隣人・及び祖國への愛と何等矛盾を含んではゐる」、³⁾ 「人間に於ける正常的な道德的な本分である」。反之利己心とは、Eigensucht を追求する、即ち之は「他人・共同體に對する無關心・無思慮・敵對・奪略への用意と結びついてゐる自愛心」であり、「あらゆる國民・あらゆる時・に於て、非道德的と考へられる人間性に於ける變態的なものである。⁴⁾ 普通に Privategoismus と云はれるものは、かく「善惡の二要素」に分け、前者は之を是認し、後者は之を排斥せねばならぬ。⁵⁾ 次に共同社會に於ける人間には、隣人及び共同體に對する關心、即ち Gemeinwohl を追求する共同心 (Gemeinsinn) がある。自愛心は個人の自己への關係に於て、共同心は個人の全體への關係に於て働く。だが個人と個人との關係に於ける行爲の動機がなければならぬ、之が正義心 (Sinn für Recht u. Billigkeit) である、⁶⁾ 以上三つの根本衝動が經濟行爲に於ても働らくとクニースは述べる。

(三)次に社會哲學的規定を窺はう。彼は國民經濟を解くに、「歴史的國民經濟の具體的基礎」を敘述する事を以て初める。これには二つのものがある。(a)國家の個有なる地域 (die eigentlichen

4) K. Knies, ibid. S. 159.

1) S. 159. 2) Eigenwohl

3) ebenda.

4) SS. 236, 237.

5) S. 242.

5) S. 201.

とは自己保存・快感・自己を主張し完成せしめんと

6) S.S. 240, 241.

Territorien der Staaten)——地域とは「自然によつて與へられた地盤」であり、「此地盤は常に具體的な個有性に於てのみ存在する。¹⁾」故に地域と國民經濟の諸現象に對して軌範的なものとして表はれる諸條件(地域の表面・高さ・氣候・水路・海岸線・境界を接する土地の性質等々)との自然必然的關係が指示せらるれば、個々の國民の經濟的基礎に於ける自然的差別が確立せられる。²⁾即ちその國の生産物の種類と品質・人間の氣質・消費財の種類等に於ける地域の個性が明かにされる。(b)國民の個有なる本質(das eigenartige Wesen der verschiedenen Völker)——クニースは國民經濟の考察に當つて甚だ重要である人間性の具體的研究が從來無視されてゐたことを指摘する。³⁾スミスは經濟行為に於ける人間の衝動を鋭く考察して先人を凌ぐ大事業をなしたが、「人間の國民的性格」は何處にも考察されてはゐない⁴⁾と彼は云つてゐる。然らば國民とは何であるか。それは如何なる前提をも待つことなく、一般的生活經驗から必要な要素が異議なく與へられてゐて、指し示され、⁵⁾直ちに發見せられるが如き對象の一つである。⁶⁾人間の國民的要素を生ぜしむるものは「血統と共同なる體験」であり、國民には「統一的なる精神」が生ずるから、「國民は個々の個人の勝手な總計とは違つたものである。⁵⁾」

この二つの具體的地盤の外に、國民經濟に作用を及ぼすものに、國家權力・宗教・教會・支配的思潮がある。⁸⁾かく國民經濟が種々の條件の上に考察さるべきことは、國民經濟が「全歴史的國民生活との統一的聯關に於て」理解さるべき事を意味する。蓋し「國民の經濟的狀態及び發展は、國民

1) SS. 44-45.

2) ebenda. u. SS. 45-61.

3) S. 67. 4) SS. 68-69. だが此の點は、Smith 自身に就て深く吟味されねばならぬ。

5) S. 125.

6) S. 79.

7) 國民の特殊性に對立して、萬民主義的平衡へと働く力が存在するが、十五世紀の中葉以來、ドイツ・イタリーの國家形成によつて、國民性の差異は強化せられた。SS. 80, 81.

の全生命有機體と密接に結合された一環として見らるべきであるからである。かくて國民經濟は一有機體である。只此處で問題であるのは、ヨリ高度な有機體なのであつて、その特殊の本質はそれが植物的及び動物的な自然的個體の有機體ではなく、『複雑なる物體』、即ち文化生産物として生成をなせる集團有機體 (Collectiv-Organismus) である』と、彼は更に之を特徴づけて云ふ。

(四)、最後に國民經濟の歴史哲學的規定を概説する。有機體としての各國民經濟は個有的なる發展を遂げる。それは國民史と人類史との聯關に於て考察される事を要する。然らば國民史と人類史とは如何なる關係にあるであらうか。兩者の發展は全然一致するものではない。又逆に兩者は全然沒交渉でもない。我々は、國民史に於てそれに個有的なものと共に、人類史との類似性・共通性を認めなければならぬ。²⁾ 斯の如くクニースは國民の史的發展を、一般人類史的發展とそれに個有なる發展とに二分する。この區別は國民經濟の發展に就ても同様に云はるべきであり、その正しい把握に重大なる意義を持つ。³⁾ 即ち國民經濟の發展には二つのものがある、一は「人類の歴史的生命に於ける國民經濟の發展」、他は「各國民の生命内部に於ける經濟的發展」である。⁴⁾ 此見地より彼は、リスト及びロッシャーを批判する。リストの國民經濟發展段階説は、英國の經濟狀態を最高の發展段階となし、國民經濟はその方向に向つて進むとなすけれども、之はこゝに云ふ第一のものゝみに注目して作製され、ヘーゲル哲學の影響を受けて抽象的に構成されたものである。⁵⁾ ロッシャーは反對に、第二の發展過程に注目して段階説を建て、「非常に大なる永續的な功績を成し遂

8) SS. 106-141.

1) S. 141.

2) 國民史と人類史との類似性は個人の普遍人間的同種性 (allgemeinmenschliche Artgleichheit) に基づく。SS. 146, 147

3) SS. 151, 152.

4) SS. 381, 382. Vgl. SS. 151-153

5) SS. 366-369.

げた」が、彼は國民經濟の歴史より眞理を得んとするに熱心なる餘り、第一のものを充分に注意しなかつたのである。¹⁾

最後に國民經濟の個有なる發展に關する一つの反對説に觸れておかねばならぬ。彼等は國民經濟の基礎が個有的であることは承認するけれども、この個有性は科學的・技術的知識の擴大、交通の發展等によつて重要性を失ひ、國民經濟の基礎は一般化せられるとなす。が之は誤謬である。

蓋し文化の進歩は益々能力を對立せしめ、些細なる差異が決定的作用を及ぼして個有性を強化し、低い文化段階に於ける基礎の類似は、發展を遂げた差異の缺乏にすぎないからである。²⁾

以上がクニースの國民經濟の規定の概要であるが、その特徴的なものを掲げて後述する批判への手引としやう。先づ彼は人間・國民經濟を有機體として把へる。次に國民の規定が不分明であり、民族・國家・國民の區別が明瞭ではない。經濟行爲の實踐の規定は、Privategoismusを善惡の二要素に分つ外、スミスのそれと略等しく、倫理學的基礎に於てはスミスより遙かに劣ると云はなければならない。³⁾最後に彼は國民經濟の發展には、人類史的發展と個別的發展との二相が存在することを指摘するけれども、その間の關係が明瞭ではなく、彼が特に強調せんとするは、國民經濟の個有性の強化の一面である。

二、國民經濟學の課題と方法

1) S. 154.

2) S. 92.

3) Moral Sentiments に於けるスミスとの比較に於て云ふのである。

上述の國民經濟を對象とするクニースの國民經濟學の課題と方法とを採ぬるに當つて、先づ彼の立場を知ることが必要である。初めに國民經濟學の科學的性質に就て彼の云ふことを聞かう。彼は本書の序文に於て、「政治經濟學の字義より判明する意義深き諸目標¹⁾」として左に要約するが如き命題を掲げてゐる。

一 經濟學は、人間生活の一領域即ち人間的、目的を達するための人間的行爲・人間的狀態及び課題を取扱ふ。この生活領域は、經濟財によつて他と區別されるが、經濟財は物的本質としてではなく人間の意欲及び行動の對象であり、欲望の満足的手段としてのみ考察されるのである。

二 技術の問題そのもの即ち物財の生産に於ける外的態度の術に關する説明は、政治經濟學に屬さない。

三 問題は單なる經濟學ではなく、「政治」經濟學である。之は次の二面より注意さるべきである。(a)此處で云ふ「政治的」とは、社會的と區別される意味での政治的又は國家的の意味ではなくその意味での社會的をも含む。政治經濟學は又社會經濟學をも意味する。(b)政治的從つて社會的・政治的經濟學は、特殊化された家政内部の出來事及び私經濟生活の範圍に向けられてゐる研究と區別さるべきである。政治經濟學の取扱ふものは、一の全體に編入せられた經濟現象即ち法的秩序内部に於ける社會的及び政治的條件の上で・及び國家組織から起るところの人間の經濟的・共同生活 (wirtschaftliches Gemeinschafts-Leben) の現象である。故に政治經濟學は、現代「國家及び社會

1) SS. 1-4.

科學」(Staats u. Gesellschafts-Wissenschaften)と呼ばれる科學に編入さるべきである。——ケニースは之を又「道德的政治的科學」(Moralisch-politische Wissenschaften)とも呼ぶ。その科學論上の地位は、自然科學と精神科學との中間に位する。前者の如く人間精神の外部にある外界の現象を取扱ふものではなく、又後者の如く人間の内部に於ける思想及び表象の世界を對象とするものではなく、人間の活動に基づくものであるが、多くの個人及び全國民の社會化され、法的秩序を持つ生活共同體、感覺的に知覺可能なる外界の狀態が問題なのであるからである。

四、「國家及び社會科學」の中で、政治經濟學は、經濟的欲望・經濟的活動・經濟的事象及び經濟的狀態の領域によつて他の科學と區別される。

以上の四命題は經濟學の一般的概念及び學問的性質を示してゐる。經濟學は技術學及び私經濟學と區別されて、「一の全體に編入せられた・法的秩序内部に於ける社會的政治的條件の上で、及び國家組織から、起るところの人間の經濟的共同生活の・現象」を取扱ふ政治的社會的經濟學であると彼は云ふ。次に經濟學の科學論上の地位の指定は、恐らくこの方面の先驅に數へらるべく、現在「テュープスの學」として、歴史學及び自然科學から區別されてゐるもの、³⁾萌芽をこゝに見ることが出来るであらう。

次に歴史學派としてのケニースの立場は、彼が「私の政治經濟學の把握の暫定的形式化」¹⁾と呼んでゐる「經濟學の歴史的把握に基づく根本命題」⁵⁾によつて更に明瞭に窺ふことが出来る。次に要約

1) S. 436 Dilthey が精神科學と呼ぶ以前に、此の名稱を用ひたことは知らるゝところである。Vgl. Dilthey, Ges. Sch. Bd. V. S. 31.
2) J. B. Say が經濟現象から政治現象を捨象してしまつて以來、經濟學は政治經濟學から離脱してしまつたのであると彼は云ふ。
3) 西田博士、哲學の根本問題續編 pp. 218—225參照
4) S. IV 之は暫定的であると共に決定的であつた。5) SS. 24, 25.

するものが之である。

一 經濟學の理論は、經濟狀態と同じく歴史的發展の產物である。

二 經濟學は人類的及び國民史的時期の全有機體との活々せる結合に於て、時間・空間・國民性の諸條件と共に、及びそれらから成長し、存立し、ヨリ進んだ發展へと形成せられる。

三 經濟學は歴史的生存を理論の内容に持ち、結論に歴史的解答の性格を與へずにはおかない。

四 經濟學の「一般法則」は、真理の歴史的解明の一段階を示すものに外ならない。而してその數量に於ても、形式に於ても、絶対に完結せるものとは説明されえない。

五、歴史的發展の一段階に妥當性をかち得た理論の絶対主義自身、その時代の子であり、經濟學の史的發展の一定の段階を示してゐる。

我々はこの根本問題を更に詳細に説明することによつて、クニースの歴史學派經濟學の課題と方法とを明かにしたいと思ふ。我々はこれらを整理して次の四命題に要約する。一 經濟學は現實の歴史的經濟生活を對象とす。二 經濟學の理論は歴史性を有す。三 經濟學の理論は空間的（國民的）にも差異を有す。四（故に）理論の絶対主義は廢されねばならぬ。

一 經濟學は現實の歴史的經濟生活を對象とす。（根本命題の三）

國民經濟學は國民經濟的生命の事實を基礎とし、それより離れて恣意的に理論を構成することとを排せねばならぬ。さて國民經濟的事實は、非經濟的現象と密接なる聯關を持つてゐる。故に「現

實的生の經濟的事實を國民經濟的推理の基礎となせばなす程、若し人が現實と矛盾する結論に到達すべきでないとするならば、自覺的に、純粹には經濟的性質を持たぬ諸要素と共に考察せねばならぬ。¹⁾人或ひは之を「他の科學」又は經濟學の理論を應用した「實踐」に委ねべきだとなすが、誤りである。²⁾加之かくして得られた經濟理論は、歷史的生命に吟味されることによつてのみ眞理性が保證される。³⁾若しも理論と現實との間に矛盾を發見するならば、人は現實を理論に打從へるのではなく、理論を捨て、現實に聽くところがなければならぬ。⁴⁾このことによつて經濟學には歷史研究が重要な課題となる。國民經濟の現在を知るためには、過去よりの發展を知らねばならぬ、單に現在をのみ知る人は近視眼者に比すべく、歷史的知識の眼鏡を使用することによつて、初めて現在の實相は把握されるであらう。⁵⁾かくて歷史研究は、經濟學の單なる補助研究ではなく、經濟學者の個有の任務の眞中にある。⁶⁾だが經濟學に於ける問題は、國民に絶えず過去には存在してゐなかつたものを如何に意欲的に形成せんとしたかと云ふことであるから、歷史研究はありしものゝ單なる寫眞の如き複製ではない。經濟理論は生命を運動に於て研究せんとするものであるから「何處よりの問題」と並んで、「何處への問題」を把握せねばならぬ。⁷⁾

二 經濟學の理論は歴史性を有す。(根本命題の一・二・三・四)

之を近世經濟學の史的發展に於て概説しやう。而して之は同時にクニースの取つた課題を認識する所以でもあるのである。

1) S. 424. 2) S. 442, S. 484. 3) SS. 472-473.
 4) S. 460. —「從來のすべての理論に矛盾する事實を承認せぬ人は、言語學者ではない」との W. Humboldt の言は、經濟學に於ても同様に正當である。
 5) S. 492. 6) S. 162. 7) SS. 484-485.

重商主義者は特に一國の諸關係を把えた。彼等が交通の欲求・國庫のため、貨幣の根元を説明するならば、國內の利益・狀態に關する限り、政治經濟學の國民的取扱ひ方であり、これは國民的分離が鋭く、國際的に戰時狀態であつた當時の表現である。彼等の有した關心も根本命題も、近代國家生活の發展段階に屬してゐる。¹⁾ 重農主義者は舊制度に反對して「^{アンシャン・レژیム}自然的秩序」を建てんとした、彼等は外國貿易・工業勞働に對する農業の基本的意義を強調し、國家及び封建諸侯の統治に反抗して、農民層の辯護人となつた。彼等は「^{ナチヨナル}理性の勝利」を確信したから、彼等の學説は重商主義よりも一大進歩を遂げた。重商主義者が國民經濟學の國民的要素を主張したとすれば、國民經濟に於ける道德的契機²⁾の舉揚は重農主義者に屬するのである。アダム・スミスによつて經濟學は大なる飛躍を遂げた。彼はイギリスの現實の研究より出發して、重農主義的理論を攝取し、重商主義の國家主義に對立して、人道主義的萬民主義³⁾を唱えた。之には理論の絶對主義が表はれてゐるが、同時に第三階級との深き結合を示してゐる。スミスの理論は歐洲に傳はり、イギリスの産業狀態は將來到達さるべき模範と考へられて、經濟學者は何れもスミスの理論を模倣することに身を肖した。が之は正しかつたか？ スミスの理論の絶對主義が主張する如く、國家間の制限は無くなつたか？

事實は之に反する。ナポレオン戰爭時代の反動は、國民的特殊性と獨立性の意識を益々強烈ならしめた。此の反動の正當性と必然性を證明せんとして立上つたのが、アダム・ミュラー及びフ

1) SS. 25, 26 SS. 260, 261.
2) S. 26, SS. 261-263, S. 275.
3) SS. 26, 27, SS. 276-279.

リードリッヒ・リストである。¹⁾ 彼等の所論は全然一致してはゐないが、スミス經濟學の自由主義的傾向に反し、國家活動の必要なるを力説した點に於て一致してゐた。自由主義經濟學はスミス以後、自由貿易論として發展した。ドイツに於ても商業階級^{フエアケルヌシュタンド}は自由貿易論を唱え國家活動を排して個人の自由なる經濟的活動を要求した。反之ミューラー・リストの流を汲む者は、保護貿易論を主唱して、國民的力と獨立性を強調し、國家權力の經濟活動への介入を要求した。尙こゝに社會主義の主張がある。クニースに従へば、これは自由貿易論が第三階級の理論であるに對して、第四階級の理論であり、共に市民社會内部の理論であるから、自由貿易論の中に含めらるべきである。²⁾ 而して當時のドイツの國家權力は、自由貿易論と保護貿易論との對立する二つの要求に對して決定を與ふる任務を持つてゐたのである。經濟學の理論も同様に、「特にドイツに於ては、綜合を求め、保護關稅理論と絶對的自由貿易との成熟せる要求の一面性を指摘し、双方より離れ双方より攝取し、兩者を總括する中庸の道に入らんとしてゐるのである。」とクニースは云ふのである。³⁾

以上に於て、經濟學說の歴史性と、クニースが彼の國民經濟學に於て意圖したところのものが明かにされたであらう。即ちクニースは、ドイツに於ける經濟學上の對立する二要求即ち自由貿易論と保護貿易論とを、中庸の道に立つて綜合せんことを自らの課題としたのであつた。³⁾

三 經濟學の理論は空間的にも差異を有す。(根本命題の二)

1) SS. 279 ff.

2) SS. 291, 292. この點に關する論評は他日に譲る。
クニースは、この意味に於て Roscher の "Grundriss" 非常に重要視し、本書に於て、「國民經濟學の理論の新時期が開かれたとさへ思ふ」となしてゐる。
S. 34.

3) SS. 289, 290. ク

クニースは地域及び國民性の經濟學への影響を説き、之をイギリス人¹⁾・フランス人²⁾・イタリー人³⁾・ドイツ人⁴⁾に就て證明せんとしてゐる。此處にはドイツの國民性とドイツに於ける經濟理論の發展に就て彼の云ふところを聞かう。ドイツの國民性は「哲學的認識への素質・全ての知識に於て有機的體系附けの衝動・教養の多面性・異質的なものを合成する即ち外國の營養品をドイツ人の血に化する傾向性と能力・人道主義・歴史的感覚⁵⁾」に於て特徴づけられるが、之が經濟理論の發展に與るところ多大であつた。先づアダム・スミスの學說の承認と検討とは、英國と並んでドイツに於ける程盛に行はれたところはなかつた。又經濟學の哲學的基礎づけの要求は、早くより唱えられてゐた。同時に國家權力の行動と個人の經濟的活動との聯關の遍在が認識されてゐた。更に經濟學の法則の歴史的被制的性の認識は早く準備されてゐた。而して此處に經濟學の課題の解決に非常なる功績を持つ國民經濟學の歴史的、方法が出現する地盤が與へられてゐたのである。

四 經濟學に於ける理論の絶對主義は廢せられねばならぬ。(根本命題の四・五)

自由主義的經濟理論の根底に横はるものは、「理論の絶對主義」(Absolutismus der Theorie)である。これは「經濟學の課題の科學的勞作に於て、無條件的なもの、即ちあらゆる時・あらゆる國及び國民性・に對して同様に妥當するものを提供せんとする要求⁶⁾」を意味する。人は之を時に萬民主義(Kosmopolitismus)と云ひ、又永遠主義(Perpetualismus)と云ふ。が前者は空間的制約を無視せるを主張するに似たり、時間的制約を超えんとする意味を表はさず、後者はその反對であ

1) SS. 317-320.

5) S. 329.

2) SS. 320-324.

6) S. 24.

3) SS. 324-328.

4) SS. 328-334.

つて「絶對主義」はこの兩面を兼ね備へるものである。¹⁾クニースが理論の絶對主義を排すべしとなす根據は、既に明かであらう。彼はこの主張自身歴史的產物であることを正當にも指摘する。而して之に對する批判の試みは、既にミユラー及びリストによつてなされたが、前者は萬民主義に就てのみ批判し、後者は永遠主義のみを排撃したに留つてゐたのである。²⁾然らばクニースは彼自身の主張を如何に特徴づけるのであるか。「相對性の原則」(Princip der Relativität)³⁾と呼ぶものが之であつて、理論が時間的・空間的に、制限された相對的妥當性のみを有することを意味する。クニースは、中庸の道に立つて自由貿易論と保護貿易論との綜合と云ふ彼の課題を解決せんとするに當り、「絶對的解決」を斷念せねばならぬと云ふ。曰く、

「かの綜合的課題に就ては、重商主義的及び重農主義、スミスの理論の簡單なる並置が問題であるが如き誤解には警戒するを要しないであらう。我々はむしろ、國家的に秩序づけられたる文化に於て、人間の文化の實現のために相互に權利づけられた、而して事實存在する二つの生命力(Lebensmächte)——一は個人より出でて個人的經濟活動の自由なる範圍のために活動すべき、而して他は國家權力より出で、共同の要求のため、國民全體の生活のために活動し、目的を自覺して保護をなすべき——の原理的承認へ歸らなければならぬ。(クニースはつゞいて國家有機體説を展開する。即ち個人と國家との原理的承認とは有機體的承認を意味する——出口)……かくて實際又政治經濟學の新時代に對して次の事は特徴的である。即ち個別的な經濟が、只『國の富』『國家全體』の目的・普遍的國家權力の課題のための手段としてのみ觀察せられないと云ふこと、だが同様に後者は個人經濟を保護・促進することのみにその本分を見出すべきではないと云ふこと。我々は誤れる態度から免がれ、初めから二つの生命力の事實上の存在をそれらの特殊的な衝動・力・目的と共に注目して、それらの同時的な相互存立と共に、時間の經過に於ける兩面的な發展過程を研究すべく努めねばならない」。

於此、我々はクニースが相對性の原則と稱するものが、有機體說的解決であり、又理論の相對

1) ebenda. 2) S. 28. 3) S. 356.
4) SS. 298, 299.

性のことであることを知るのである。

最後に經濟學の法則に就て彼の云ふところを記さう。經濟學が「現象の法則」を扱ふものであることは疑ひを容れない。而してこの法則は、「發展法則」と「類似法則」のことである。蓋し經濟現象の時間的・空間的制約は、法則をかく特徴づけるからである。¹⁾

三 クニースの國民經濟學に對する若干の考察

我々はクニースの國民經濟論及び國民經濟の課題と方法とを概説することによつて、彼の國民經濟學の概念を得た。次に之に若干の考察を加へて我々の研究に資したいと思ふ。が先づ我々は當時のドイツの經濟狀態と思想界の潮流とに就て、理解を得ておく必要がある。周知の如く、ドイツの産業資本主義は、一八四八年より普佛戦争（一八七〇年）に至る間にその基礎を確立した。²⁾即ちクニースの「歴史的立場より見たる國民經濟學」は宛もドイツ産業資本主義の確立當時に於ける經濟學的勞作だつたのである。我々は先づこのことを銘記せねばならない。次にドイツの思想界に見られる著しい現象は、「歴史學派」(historische Schule)の隆盛である。「歴史學派」は廣狹種々の意味に用ひられるが、我々は今トレルチに從つて之を解さうと思ふ。即ちアダム・ミュラー及びシエリングより哲學的基礎を得て、法律學に於けるサヴィニー、アイヒホルン・言語學に於けるG・グリム・歴史學に於けるベック・等によりて主唱せられ、「有機體説」として特徴づけられる思想を

1) SS. 477-479.

2) 柚木重三「獨逸經濟史概説」(經濟史研究第四十四號 p.49)

云ふのである。¹⁾而して經濟學に於ける歴史學派も亦、此思想の一表現であつた。

さて我々は我々の考察を、上述のクニースの國民經濟學の特徴的な四命題に就て試みやう。

一 彼が國民經濟の現實を主視し、理論よりも現實に優位を置いて、抽象的な理論を排斥せんとしたことは眞に正しいと云はねばならぬ。主觀的な構想を以て現實を打從へ、事實を歪曲せなければならない。しかしこの正しい態度にも係はらず、彼の國民經濟論に於て批判すべき最も根本的な點は、國民經濟が眞の共同經濟として把えられてゐないと云ふことである。彼に於ける共同生活²⁾とは、社會經濟と國家經濟との有機的統一としての國民經濟のことであつて、具體的自覺的な國民共同經濟ではない。

二及び三 彼が經濟現象從つて經濟學の歴史性及び國民性を指摘したことは正しい。だが彼は之を基礎づける如何なる社會哲學と歴史哲學とを持つてゐたか。彼は從來の經濟學の根本前提の一である「私有財産」を以て歴史的產物であると云ふ。³⁾けれども私有財産が発生する以前の共同社會(即自的な共同經濟)に於ける生産手段の存在形態にまで歴史的知識を深めて私有財産の歴史性を追求するのではない。かくてそれはその眞相に於て極められてゐると云ひえないのである。又從來の經濟學に於て運命的な役割を演じた Privategoismus に就ても、それが歴史的の一時代に於て經濟學の根本假定となることを指摘したことは正しいとしても、原始共同體に於ける經濟行爲

1) E. Troeltsch: Ueber den historischen Entwicklungsbegriff und die Universalgeschichte (Ges. Sch. Bd. III SS. 277-303)

2) クニースのレオン・ワラス批判參照 Knies ibid. SS. 500-506.

3) SS. 180-223.

の動機にまで遡つて、その展開の一段階として之を基礎づけることを怠つて、之を善惡の要素に分ち、一をとり他を排することによつて自由主義的經濟學の抽象性を免れんとしてゐる。だが善惡の抽象的對立を以てしては Privategoismus は止揚されえない。經濟行爲の動機は Privategoismus であることを止めて、^{アウフヘーベン}原始共同經濟に於ける動機を具體的に取りかへしてのみ、同時に Privategoismus がそこに保持せられて、國民共同的な經濟行爲の動機となりうるであらう。この二點を以てしても、彼の歴史哲學の不徹底は明かであるだらう。從つて經濟學に於て求めらるべき「發展法則」は、未だ抽象的であると云はねばならない。社會哲學に就ても同様である。彼は國民性を探ねて血統と地域と歴史的體驗より成ると説くけれども、「何等前提を待つことなく、指し示めされ、ば直ちに發見せられる」國民性の概念は「發出論的」であり、國民性自身が歴史的社會的であることを忘れてゐる。故に彼の云ふ經濟學に於ける「類似法則」も決して國民の個性を把握した上での法則とは云ふを得ないのである。我々は歴史哲學と社會哲學との不徹底を、クニース個人にのみ責めることは出来ないであらう。何故なら、之は「歴史學派」の有機體說一般に就て云ひうることであるから。かくて我々の批判は第四の有機體說及び理論の相對性の吟味に向はねばならない。

四 クニース從つてドイツの歴史學派の有機體說は、²⁾コントの經濟論的生物學的有機體說とは異つて、ドイツロマンティックの影響を受けた形而上學的有機體說であるが、有機體說が十八世紀の機械論的分子論的見解より一步人間及び社會の本質の把握に近づいてゐることは否定出来ない

1) Max Weber: Roscher und Knies und die logischen Probleme der historischen Nationalökonomie (Gesammelte Aufsätze zur Wissenschaftslehre S. 144.
2) E. Troeltsch ibid. SS. 280. 281.

い。けれども人間及び社會の眞實なる構造は辯證法的であつて、有機體的不是な。互に矛盾する契機が、絶對に矛盾合ふが故にかへつて媒介されて結び付く辯證法的構造を有するものであつて、對立するものを全體と部分とし、全體の中に部分を入れ、矛盾なき有機的統一の中に溶し込まんとする有機體的構造を持つのではない。逆に辯證法的構造は有機體的構造を契機として止揚してゐるのである。我々は「歴史學派」の有機體説が機械論の見解より一步具體的であることを承認せねばならぬと同時に、更に之を否定することによつて肯定する辯證法的構造に於て、人間・社會・歴史を把える立場に立たねばならない。之をクニースに就て具體的に云ふならば、彼の有機體説は全體を部分より先行せしむることによつて、個人と社會に對して國家を重視する結果となり、個人主義及び社會主義に對立して、國家主義的特性を表はしてゐる。が我々が取るべき立場は、全體(國家)を重んずる有機體説的立場ではなく、部分と全體との辯證法的統一たる國民主義的立場でなければならぬ。

次に理論の相對主義に對して、我々は次の如く云はねばならぬ。自由主義的經濟學に於ける理論の絶對主義を否定することは正しい。だが理論の絶對的妥當性に對する不信は、その反對である相對主義によつて克服されるであらうか。理論が本性上相對的であることは斷はるまでもない。けれどもクニースが自ら云へる如く、「理論的眞理は歴史的に漸次に發展せしめられる」とするならば、理論の相對性は絶對主義のアンティテーゼである單なる相對性・歴史性として見らるべき

ではない。それは相對的であると同時に、歴史的發展の一段階に於ける理論的眞理として、又絶對性の面をも持たねばならぬ、夫々の理論は單に全體の眞理の部分ではなく、部分であると共に全體を代表すると云ふのでなければならぬ。此處に於ても我々は、理論的眞理を單なる部分として全體の中に溶し込まんとする有機體説に逢着する。我々は理論を有機體説ではなく、辯證法的に把えなければならない。有機體説的であることによつて、理論は具體的に實踐的とはならない。クニースは、經濟學に於ける歴史研究の重要性を強調する。けれども、實踐的研究に就ては單に「未來の目的に關して確信を得、目的への道を辨へる」¹⁾となし、感性的なる實踐を經濟學の反省の基礎事實とはなしてゐないのである。クニースの本書はドイツ學界に於て無視された、が之は單に彼の文體が *ungelenk* であり、理論がモザイクの如くであるによるもののみではないであらう。又彼は獨自の經濟學體系を樹立するに至らず、その理論は全くドイツの自由主義的經濟學と異なるところはなかつたと云ふ²⁾。之彼の立場の實踐的結論であつて、我々の深き反省を要求するものである。

以上が我々のクニースの理論のイデオロギッシュな特徴づけとその批判である。要之彼の理論は、經濟現象を歴史的社會的な立場から考察する具體的な立場に立たんとしながら、而も有機體説的哲學的基礎の故に、事態の眞相の把握には到達出来なかつたのである。之歴史學派の思潮に育つたデイルタイをして、「彼等の研究と歴史現象の評價とは、哲學的基礎付けが缺けてゐる

1) Knies *ibid.* S. 376 Vgl. S. 436.

2) M. Weber, *ibid.* S. 43.

3) L. Cossa, *An Introduction to the study of political economy* (1893) p. 412.

た。歴史學派は明確なる方法に到達しなかつた¹⁾と云はしめ、歴史學派に哲學的基礎を與へることを以て、彼自らの生涯の理論的課題たらしめた所以であらう。しかしながら、このイデオロギツシユな批判にも増して吾人に強く批判を迫るものは、クニースの理論の現實的批判^{レアル}、即ちドイツの後進資本主義に對する彼の態度の批判である。彼は自由主義的經濟學の現實的特徴を、「第三階級」「商業階級」の理論として正しくも扱えた。にも係はらず、彼が全體(國家)の立場に立つて自由主義的經濟學を有機體的に綜合せんとしたことによつて、資本主義に對して肯定的・保存的なる理論であつた、のみならず國家活動の媒介を通して遂行せられたドイツの後進資本主義の發展は、彼の國家主義的經濟理論に反映してゐると云はなければならない。而して彼の歴史學派的經濟學が、資本主義的經濟學の一形態であることは、既にハンス・フライアーが指摘せるところである²⁾。

我々は自由主義的經濟學を有機體說的にではなく、辯證法的に止揚することによつて、國民主義的經濟學を築かんことを期する。その途上に於て、國民經濟學を目指し乍ら、而も上の如き抽象的な理論に墮したるクニースの理論を反省の對象とし、覆轍を履まざらんことに努むるは、意義あることと云はねばならない。而して我々は我々の課題に於ては哲學的基礎付が如何に根本的に重大であるかを、此處に於ても痛感する次第である。

1) Dilthey, Ges. Sch. Bd. I SS. XVI-XVII.

2) H. Freyer Die Bedeutung der Wirtschaft im philosophischen Denken des 19. Jahrhunderts SS. 129, 130.